
実践女子学園120周年記念フェスティバルに参加した 大学生スタッフの意識変化

駒谷 真美

1. はじめに

(1) 「実践女子学園フェスティバル」における大学生スタッフ募集の経緯

実践女子学園は、2019年に創立120周年を迎えた。記念行事として「実践女子学園フェスティバル」（以下「Jフェス」と略す）が、2019年5月11日・12日渋谷キャンパスで実施された。Jフェスでは、野外イベント・屋内イベント・コンサート・企業協賛プロモーション・記念グッズ制作の5プロジェクトが設置された。プロジェクトごとに、実践女子学園中学校高等学校の生徒たち、実践女子大学・実践女子大学短期大学部の学生たち、教職員による合同チームが組織され、企画から実施まで取り組んだ（実践女子大学、2019）。

これに先立ち2018年度前期から、Jフェスに参加するボランティアの学生スタッフを学部2年生と短大1年生を対象に、在学生支援システムJCAN（2018年当時）を通じて募集し、119人の応募があった。2018年8月3日には、応募学生110人（欠席者除外）を対象に、プロジェクトメンバーであった本研究者による事前研修を実施した。前半は学生スタッフの心構え（ボランティアスタッフの基本姿勢 / 挨拶・言葉遣い・メールのマナー / SNSの注意事項）を講義し、後半はプロジェクトチームごとにミニワークショップ（Jフェスのイメージ共有）を行った。研修後、学生スタッフとして活動継続を希望する59人が、プロジェクト初期メンバーとなった。

(2) 大学生スタッフの発達の・世代の特徴

Jフェスに参加した大学生スタッフたちは、概して青年期に属している。この時期の発達の特徴としては、保護者に対する第二次反抗期が終わり、心理的に依存していた保護者から自立する心理的離乳（psychological weaning）がみられる（Hollingworth, 1928; 落合, 1991）。エリクソンの心理社会的発達理論では、青年期は前段階の思春期に引き続き

「同一性 (identity) の確立」が課題であり (Erikson, 1982)、コールバーグの道徳性発達理論では「他者や社会の視点」を持てるか否かの過渡期にあたる (Kohlberg, 1981)。青年期の大学生スタッフたちは、正に「自分育て」の渦中にある。

加えて、2000年前後に誕生した彼女たちの世代は、いわゆるZ世代 (Generation Z) と呼称される。デジタルネイティブとしてマルチデバイスを駆使し、Social Media Communication (SMC) を得手としている。LINE・Instagram・TwitterなどのSNSで、常につながり続けている。欲しいものはクリックすれば迅速かつ簡易に入手できる感覚を持ち、自立心は強い傾向がある (IBM, 2017)。「第54回 学生の消費生活に関する実態調査」(全国大学生生活協同組合連合会, 2019)によると、大学生の8割がアルバイトを経験し、バイト中心の生活を送っている。

(3) 研究目的

このような発達的かつ世代特徴を示す大学生スタッフたちが、Jフェスでは各プロジェクトの企画から実践まで、ボランティアとして参加する。この稀有な活動の始終を大学生スタッフの視点で見取ることに、研究意義があると考えた。そこで、Jフェスに参加する大学生スタッフが、ボランティア活動を通して、どのように意識 (自発性・無償性・達成感・自己肯定感など) が変化していくか、その様相を明らかにする。なお本調査は、当初のJフェスプロジェクトでは計画されておらず、本研究から随時提案したものである。

2. 方法

(1) Jフェス活動開始前：事前アンケート

事前アンケートは、Jフェス活動を開始する前の段階で、ボランティアスタッフを希望する学生の意識を把握する目的で行った。本学学長室・総務部・企画広報部の協力を得て、2018年8月3日に事前研修の一環として、学生スタッフを希望した大学2年生と短大1年生を対象に、PROG (Progress Report on Generic Skills, 社会に求められる汎用的な能力・態度・志向を測定し育成するプログラム, REASAC, 2019) のコンピテンシーテストをマークシートによる配布回収法で実施した (実施時間50分)。PROG受験者数は68人であった。

今回のコンピテンシーテストは、PROGを制作した株式会社リアセックがアンケート趣旨を了承した上で、通常のPROGから本研究と合致した項目を意図的に抜粋している。「コンピテンシーを支える3つの力」項目から、対人基礎力 (親和力 / 協働力 / 統率力)、対

自己基礎力(感情制御力 / 自信創出力 / 行動持続力)、対課題基礎力(課題発見力 / 計画立案力 / 実践力)に関する12問を、7段階評定尺度で尋ねた。下位項目として、親和力・協働力・統率力・感情制御力・自信創出力・行動持続力・課題発見力・計画立案力・実践力に関する33問においては、5段階評定尺度で尋ねている。

なお具体的な質問文は、リアセックの権利関係により非公開である。リアセックから上述の質問項目のraw data (EXCELファイル) とレベル判定のための「コンピテンシーテスト Can-Do-Chart」(リアセック, 2018) を提供された。

(2) Jフェス活動終了後：事後アンケート

事後アンケートは、Jフェス活動が終了後、実際に最後まで参加した学生の意識を把握する目的で行った。事後アンケートは、全学授業支援システムmanabaに設定した「Jフェス2018-2019」コース(情報センターの協力を得て2018年7月に設置し、学生のJフェス活動支援に役立てていた)のアンケート機能で、Jフェス最終期の学生スタッフ43人を対象に、2019年5月18日から6月30日までWeb上で実施した。回答者数は28人であった。

質問項目は、まず学生スタッフに応募した理由 / 気づいたことや考えたこと(フェス活動開始・フェス間近・フェス当日・フェス終了後)の5問について、自由記述で尋ねた。次に、Jフェス活動における成長意識度 / 活動で時間拘束される嫌悪度 / 活動により学園を知る契機度 / 活動の有益度 / 活動による卒業生の愛校心度 / Jフェスの盛り上がり度 / Jフェスで学園・大学に対する親近感度 / スタッフの無償意識度 / 活動における人間関係疲弊度 / 卒業後Jフェス希望度の10問は、4段階評定尺度で尋ねた。

当初事後アンケートは、事前アンケートと比較するためPROGを検討していたが、Jフェス準備が進行するにつれ、事後アンケートの追加予算申請と時間や場所の確保が困難になった。やむなくPROGの事後アンケートを断念し、manabaに切り換えた。

(3) その他：リフレクションシート・インタビュー

アンケート以外に、補完目的でリフレクションシートとインタビューを実施した。リフレクションシートは、プロジェクトチームごとにmanabaのレポート機能で、Jフェス活動初期(2018年8月3日事前研修後)と活動中期(2019年3月20日～4月22日)に収集した。活動初期は、野外イベント(対学内)チーム、野外イベント(対学外)チーム、屋内イベント・コンサートチーム、プロモーション・企業協賛チーム、記念グッズ制作チームから43人の回答があり、活動中期は29人であった。インタビューは、2019年5月11日、野外イベントチーム「初風緑特別ステージ」を担当した学生スタッフ4人に、イベント終了後本研究者の研究室において、半構造化の座談会方式(各10分程度)で実施した。



写真1 野外の「初風線特別ステージ」でゲストに因んだクイズをする学生スタッフ

3. 結果と考察

(1) Jフェス活動開始前の学生スタッフの意識

① Jフェス参加希望学生のコンピテンシー

PROGのコンピテンシーテストから、大学生スタッフの意識変化に関わる対人基礎力・対自己基礎力・対課題基礎力に焦点化し、結果と考察を述べる。方法で述べたように、通常のPROGと形式が異なるため、PROGを実施している私立4年制大学や女子大学、本学の1・3年次との比較は行わない。加えて、PROG回答者の中で、事前研修に出席したもののJフェスに参加しなかったグループと実際にJフェスに最後まで参加したグループに2分類し、IBM SPSS Statistics 25を使用し、独立したサンプルのt検定を行った結果、対人基礎力・対自己基礎力・対課題基礎力いずれの項目にも有意差が見られなかったため、「Jフェスにボランティアスタッフとして参加を希望した学生（PROG回答者）」と総じて分析した。

「コンピテンシーテストCan-Do-Chart」によると、評価判定レベルは全7段階であり、レベル1～4は学士課程修了段階、レベル5～6は社会人1～3年目に期待される段階、最終のレベル7は若手リーダー段階と設定されている（リアセック, 2018）。Jフェス参加希望学生の平均値は、対課題基礎力3.63 > 対人基礎力3.47 > 対自己基礎力3.21であった。下位項目の親和力 / 協働力 / 統率力 (対人基礎力) ・感情制御力 / 自信創出力 (対自己基礎

力) / 行動持続力・課題発見力 / 計画立案力 / 実践力 (対課題基礎力) のいずれも概ねレベル3に該当していた(図1参照)。

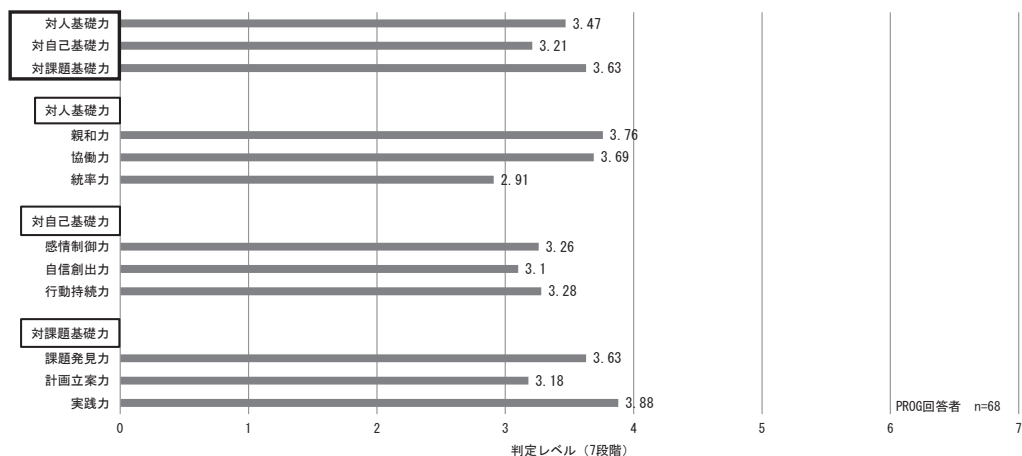


図1 事前PROGコンピテンシーテストの結果(リアセックのデータから本研究者が作成)

「コンピテンシーテスト Can-Do-Chart」と照合して、Jフェス参加希望学生のレベルを考察する。まず対人基礎力として、親和力は他者との意見の相違について許容できるレベル、協働力は自ら情報発信しチーム課題に取り組めるレベルの範疇と考えられる。統率力に関しては、レベル3に近いレベル2であることから、自らの意見を他者に論理的に伝達するレベルであり、意見が異なる他者に対して説得できるレベルには到達していないと推察される。続いて対自己基礎力において、感情制御力は多くの責務に直面し多少の動揺が生じても対応できつつあるレベル、自信創出力は不透明な状況でも自己を信じ前向きに行動し始めるレベル、行動持続力は自分の役目を認識し方法を模索するレベルと思われる。最後に対課題基礎力について、課題発見力は興味のある領域に関して積極的に情報を収集し取捨選択できるレベル、計画立案力は問題を予測し具体的な計画に取り組み始めるレベル、実践力は試行錯誤しつつ進行できるレベルであると察せられる。

ただし上述のレベルは、あくまで指標であるため、ボランティアスタッフを希望する学生全員が到達しているわけではない。Jフェス参加を希望する学生たちの傾向として、とりあえず実行してみる「実践力」は認められるが、場を読み組織を動かす「統率力」は途上であるといえる。

② 学生スタッフのJフェス応募理由

学生スタッフがJフェス活動に応募した理由について、manabaアンケートから自由記述の結果をまとめた。28人の回答から頻度の高いキーワードを選出し、3カテゴリに分

類し表1に示した。学生たちは、主に「学生ならではの挑戦ができる」「大学生活のよい思い出になる」「就活に役立つ」と考えて、応募していることがわかった。この結果から、学生スタッフは、現状の学生生活に対し達成感のある体験を希求する背景があったと考察する。

表1 学生スタッフがJフェスに応募した理由

カテゴリ	抽出数	【キーワード（抽出数）】主な記述抜粋
挑戦	15	<p>【今までにない経験（8）】</p> <ul style="list-style-type: none"> ● ボランティアに参加してみたかったから ● 自分たちの手で大きなプロジェクトを成功させたかったから ● 自分からこういったイベントスタッフに応募したことがなく、またイベント概要を聞いて面白そうだなと感じ、私もやってみたくと思ったため ● 大学生活をただ送るだけではなく、学校行事等に参加して何かを達成したいと考えていた時、学生も一緒に一つのイベントを作り上げるJフェスの学生スタッフがやりたいことにピッタリで、魅力的に感じたから <p>【学生時代ならではの体験（7）】</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 社会人になる前にチームで何かを成し遂げる経験をしたかったから ● 大学生活のうちになにか頑張って達成感を味わってみたかったから ● 何か大学生活を通じて、自分の誇れるものが欲しかったから ● 今しかできないことをやってみたく
思い出	13	<p>【学生時代の思い出（6）】</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 実践女子大学で特に何もしないで過ごしてきてしまったから、何かできないかと思った ● 大学生活で頑張ったことが何も無かったので、何か思い出に残ることをしたい ● サークルや部活に所属しておらず、授業以外で大学に関わることを何もしていないと気づき、思い出に残ることをしたいと思ったら <p>【大学貢献（5）】</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 実践女子大学の良さについてもっと知ってほしい ● 中高から実践にお世話になっていて何か学園に恩返しできたら <p>【120年記念（2）】</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 120周年をお祝いするイベントに関わりたかった
就活	6	<p>【就活有利（4）】</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 就職活動で学生時代に力を入れたこととして話せると思った ● 将来企業と関連してやっていくのは貴重な経験だと思った <p>【スキル習得（2）】</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 協賛を担当して企業の方と話せるスキルを身につけたかった

(2) Jフェス活動終了後の学生スタッフの意識

manabaのアンケートから、大学生スタッフによるJフェス活動の評価(4段階評定尺度)と実際の活動体験(自由記述)について述べる。既に方法で説明した理由により、PROGの事前アンケートとの比較は行わない。

① 学生スタッフによるJフェス活動の評価

Jフェス活動に関する10項目について、4段階評定尺度(とても思う・まあまあ思う・

あまり思わない・全く思わない) で尋ねた結果から、「まあまあ+とても思う」の回答を図2にまとめた。

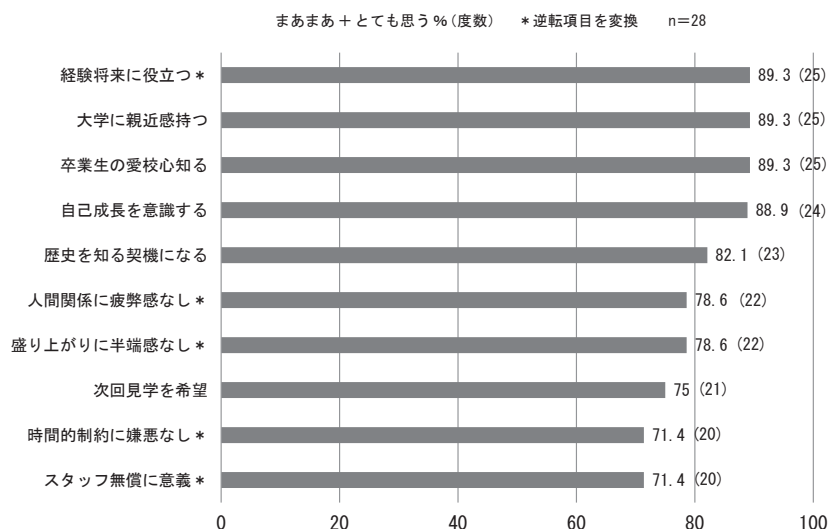


図2 学生スタッフのJフェス評価結果(事後manabaアンケート)

全体的にJフェス活動に対して肯定的評価が高かった。学生スタッフの9割近くが、「Jフェス活動を通して学んだことは将来役に立つ」「Jフェスを通して実践女子学園(大学)に親しみを持った」「Jフェスを通して卒業生の愛校心を知った」「Jフェスの活動を通して自分は成長した」と回答していた。8割前後が「Jフェスが実践女子学園の歴史を知るきっかけになった」と認識し「卒業後Jフェスがあれば見に行きたい」と希望を示していた。一方、学生スタッフの中で2割が「Jフェス活動では学生スタッフや教職員や外部関係者との人間関係に疲れた」「Jフェスはイマイチだった」と感じ、3割が「Jフェス活動は時間がかかり制約されて嫌だった」「Jフェスの学生スタッフは無償のボランティアでなく、有償のアルバイトの方がよかった」と感じていたこともわかった。

表出した結果から、まず学生スタッフ自身と大学認識の2点に関して考察する。最後まで参加した学生スタッフにとって、Jフェス活動の体験は、現在の自分の成長と未来への自己投資を意味するものであり、学生たちの前向きな考えや動機づけに寄与していくと推察する。またJフェス活動が、普段接触が少ない卒業生の愛校心を知り、自分たちが所属する大学に親近感を持つことで、自分たちの帰属意識に高める契機になった。これらの結果から、對自己基礎力の自信創出力につながったと考えられる。次に学生スタッフの本音について考察する。チームで長期間行動を共にすることは、物理的に時間をかなり拘束され、精神的に煩雑な人間関係に翻弄されたことは想像に難くない。よって少数ではあるが、数値として表出した事実は看過できない。

② 学生スタッフのJフェス活動の感想

学生スタッフが実際にコミットしたJフェス活動で気づいたことや考えたことを、自由記述で回答してもらった。28人の記述から頻度の高いキーワードを選出しカテゴリ化し、活動開始後・フェス間近・フェス当日・フェス終了後の時系列で、表2・3・4・5に示した。なお、リフレクションシートとインタビューの結果は、記述と内容が重複したため割愛する。

Jフェス活動が実際に始まると、学生スタッフに悲観的な心情が現れた。プロジェクトの見通しが不透明のため不安が広がっていた。学年・学科・学部・キャンパスが異なる学生と教職員メンバーとの意思疎通はスムーズではなく困惑を隠せなかった。次第にプロジェクトごとに具体的な問題が出現し、葛藤が増加した。一方、プロジェクト達成のためにチームで議論を重ねる協働の兆しも現れていた(表2参照)。Jフェス間近になり準備が押し迫ると、学生スタッフの不安と困惑は深刻さを帯びてきた。想定外のアクシデントが勃発し対応に追われた。同時にプロジェクトが具現化し完成図が見えてきたことで、期待と準備の目途が立った喜びにつながっていた(表3参照)。Jフェス当日、学生スタッフは、卒業生・在校生・来場者・メンバーとの交流に歓喜した。自分たちが思いを込めて作り上げたグッズやステージに対して友好的な反応があり、達成感を得ていた。改善のための率直な意見も寄せられた(表4参照)。Jフェスが終了し、学生スタッフは活動に肯定的感情を表出していた。自分たちの手で作り上げたプロジェクトが成功したことで、協働体験や達成感を実感し、自信と誇りを持つに至った。特にJフェス活動を通して実践愛が出現していた(表5参照)。

表2 学生スタッフの感想：Jフェス活動開始後

カテゴリ	抽出数	【キーワード（抽出数）】 主な記述抜粋
不安	3	<ul style="list-style-type: none"> • 基本的には学生が中心になって企画を考えたので、実際に企画を実現できるのか不安だった • 詳細が曖昧なままプロジェクトが進んでいったため、正直不安でいっぱいだった • 自分が思っていた以上に、やらなくてはならない事が多く、最初はすごく不安だった
困惑 困難	17	<p>【漠然とした困惑（10）】</p> <ul style="list-style-type: none"> • やるべき事が多くて、どうすれば良いか分からなくなった • 1つの物事を起こすまでのプロセスが思っていた以上に大変だった • 始まったばかりの段階で、連絡が少なく何をすべき時間なのだろうかと戸惑った • 学年学部学科・キャンパスの違う人たちと時間を作ってじっくり話し合い、情報共有をすることが難しかった。どう上手くやっていくかをすごく考えた • 個々の価値観・意見・考え方の違いからぶつかることが多々あり、ひとつにまとめるのはとても大変だった • ものを製作することは思ったよりも難しかった • 最終的に本番が近くなると慌てだし、色々詰め込まれ負担ばかりが増えた <p>【直面した困難（7）】</p> <ul style="list-style-type: none"> • 企業への出展のお願いがうまくいかなかった。企業を探すのが大変だった • 実際協賛を1から見つけるのがすごく大変で、電話をかけてもかけても断られたのが辛かった • 年齢幅が広い来場者全員が満足してもらえる物は何か考えることが大変だった • グッズ制作で、一から物を作ることや人へ考えていることを伝えたり意見を伝えたりすることが難しかった • 文化祭などとは違って、来場者数や予算などを考慮しながら企画や運営はとても大変だった • 実際にやってみると段取りは悪く、いつも同じ話し合いで、こちらがやりたいこともあまりできなかった。1人に対する負担が大きく、リーダーとして「全体に指示を出すことも大事だ」というから、指示を出したら、そのメンバーはやってくれなかった。やってくれないメンバーに対して大人から言うように頼むと「自分たちがいうとプレッシャーになるから」という理由で、大変なことはすべてリーダーに任せられた。 • プラモコーデチームは特に大変で、1から全部自分たちで考えていかないと行けなかったもので、春休み何回も会ったりして話し合いの連続だった。食い違いで仲間割れしてしまうグループや意気投合して進んでいくグループに分かれたり、共有をなかなか全体に教えてくれなかったり、仕事が早い人遅い人、仕事を速く行っている人全然行っていない人など色んな問題が起きて、個人的には辛いことだらけだった
協働	9	<ul style="list-style-type: none"> • Jフェスをみんなで作り上げている感じがしてとても楽しかった • チームの仕事は、1人だと絶対に出来ないことで、協力し合うという事がとても大切だと改めて感じた • みんなが最終的に目指す思いが一致していれば、まとまるのだと分かった。 • 協賛・広報が1グループとして活動していた時、Jフェスの目的や誰をターゲットにするか等、細かいところまで話し合っ、皆の前で発表したり、意見を言うような機会があまりなかったので、2グループに分かれてから、その機会が増えた。 • 初風チームは人数が少なかったが、その分採め事などもなく進めていくことができたため、少人数チームの良さを感じた • グッズ制作のチームとして、グッズを手にする方々の立場を考えて、どのようなコンセプトにするかをまず始めに決めた。話し合いが進んでいく中で、色んな意見が出たり話が行き詰ったりした時に、最初に決めたコンセプトに立ち返ることで、上手くまとまっていった。何か最初に明確な目標設定をすることの大切さを実感した
気づき 学び	8	<ul style="list-style-type: none"> • 今まで周りの意見に賛成する事が多かったが、自分の意見を今回たくさん発言したことで自信がついた • リーダーとして、グループの一人ひとりが納得するようにまとめることは大変だし、時に自分がやりたくない事もやらなければならないと学んだ • ぶつかった数だけよりよく改善できるチャンスであり、自分にはない新しい発見がたくさんあり、自分の考え方を広げる成長になった • 時には自分の意見を妥協することも必要であることを学んだ
経験	3	<ul style="list-style-type: none"> • 他のキャンパスの子と仲良くなれたり、企業の方とお話しする機会があって、なかなか経験できなかった • 電話かけに対して抵抗がなく、スマーズにかけられるようになった。電話で対面していないが、相手の気持ちを理解することができた

表3 学生スタッフの感想：Jフェス間近

カテゴリ	抽出数	主な記述抜粋
不安	10	<ul style="list-style-type: none"> • とにかく詳細が曖昧な状態で、見切り発車で進んでいる感じが不安だった • 時間がなかなか取れない中での活動だったため、間に合うのか心配だった • 本番から2か月前の段階で、サンプルの仕上がりが私たちの理想からかけ離れていたときは、当日ちゃんとしたものが渡せるのか不安になった • チラシを配っている時、本当に来てくれるのか・成功するのか不安だった
困難 困惑	9	<ul style="list-style-type: none"> • スケジュールを上手く立てられず直前になって慌ただしくなってしまうと、大変だった • 期間が思っていたよりもだいぶ短く限られ、授業と全く関係ないところで動かなくてはならなかった為、メンバーと予定を合わせることがとても困難だった • 野外ステージ担当だったが、予定通りにいかないことが多々出てきて、その都度新しい案を考えたりすることが、大変だった • グッズの完成が近づく中で、予想とは違うものが企業側のミスで起きてしまい、試作品の完成が遅れてしまうハプニングが起きた時は、なかなかうまく思い通りにスムーズには物事が進まないこともあるという事が分かった • プラメコーデの準備はほんとに大変で、たくさんの人に迷惑かけた • 学生中心というが、最終的な決定は大人が出し、その時間もかかるためギリギリになってやることを決められ、学生の負担がとても重かった。スケジュールが空いている日などはあまりないのに「集まりが悪いから話が進められていない」と言われた。期待して参加したのに「やってよかった」と思える瞬間がなかった
気づき	7	<ul style="list-style-type: none"> • 時間があまり無い中で、当日までに何をすべきか明確にするために、スケジュールをしっかりと組むことの大切さを学んだ • 自分たちが作り上げたものが形になっていく様を見て、やれることは全てできたと自信を持つことができた • 実際にグッズが完成した時は、とても達成感を感じた • ラジオ告知で、声だけで相手に情報を伝えることの大変さを学んだとともに、ラジオで伝えたことが相手に届いていることが、フォロワーの増加から分かってうれしかった • 報告・連絡・相談の大切さを学んだ。グループが分かれていたとしても、1つの班であるため進捗や何が足りないなどを細かく伝えていくことの大切さを知った • 外部の方と関わりがあったので、接する際のマナーはとても大切であると感じた
期待	7	<ul style="list-style-type: none"> • Jフェスが近づき、自分たちがやっていることがだんだん形になっていく感じがして、とてもわくわくした • 自分たちのチームが作った記念品を来場した卒業生・在学生・在校生がどのような気持ちで受け取ってくれるのが楽しみになった • 野外ステージ担当で、地域の方に交渉しに行ったり、サークルの方々と連絡を取り合ったりして、どんどん形になっていると感じたときは、すごく嬉しく、どんどんフェス当日が楽しみになった！
喜び	4	<ul style="list-style-type: none"> • 約1年間準備期間があったが、グループ内で役割を分担して、モチベーションも下がらず、Jフェスを迎えることができてよかった • 自分と違う学部の人達との出会いがあり、新鮮な環境で活動できて良かった • 地域の方がすごく協力的だったことが嬉しかった • 事務の方や先生方がJフェスの前日遅くまで、机を運ぶなど準備をされていて、感謝でいっぱいになった

表4 学生スタッフの感想：Jフェス当日

カテゴリ	抽出数	【キーワード（抽出数）】 主な記述抜粋
交流	20	<p>【卒業生（5）】</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 実践女子大学に今でも愛着を持って、Jフェスに来場して下さったOGの方が多くいて、非常に嬉しかった ● 久しぶりに母校に来た卒業生と在学生・在校生が、同じ実践の空間で創立記念のイベントを楽しんでいるのを見て、実践の歴史が凝縮されているのを感じた ● 受付をしていた時に卒業生の方が「昔はね～」と話してくれて、長く話を聞くことは出来なかったけれど、少し交流できて良かった <p>【来場者（8）】</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 来て下さったお客さんが「ありがとう」「楽しかった」と言って帰って下さるのが、すごく嬉しかった ● 出入口で仕事をしていたが、来てくれた人達がみんな笑顔で帰っていく姿を見て、本当に嬉しくなった ● 想像以上にたくさんのお客様が来て下さったことがなによりも嬉しかった <p>【在校生（2）】</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 中高生がすごく楽しそうにしている、嬉しかったし楽しかった <p>【Jフェスメンバー（5）】</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 準備している時には会うことがなかった他のグループや高校生のスタッフの人達にも会うことができ、みんなで1つのものを作っていたことに改めて気づき、嬉しい気持ちになった ● 学生同士はもちろん、職員の方々も気にかけて下さったりお手伝いしてくださったりしたため、非常に心強いなと感じた
達成感	10	<ul style="list-style-type: none"> ● 実際に自分たちが作ったグッズが人の手に渡り、喜んでくれている顔を見た時は、自分たちがグッズを作る上で大切にしてきたことが相手に伝わったような気がして、うれしかった。なかなかグッズが思ったよりも減らなかつたため、もう少しグッズの告知をしても良かったのかなとも思ったが、当日に看板を持って歩いたり、様々なやり方で当日の来場者や在校生へグッズを宣伝し、努力や工夫で配布数を増やすことが出来たため、達成感を感じた ● 子どもコーナーの担当で、子どもたちが楽しそうに遊んでいってくれて、とても嬉しかった。頑張った甲斐があった ● 自分が企画したものをたくさんの方が買って来てくれてすごく嬉しかった ● 自分たちが想像していたよりも多くの方が野外ステージに足を運んでくださって、本当に嬉しかったです。どの企画も、たくさんの方の笑顔が見れて、やってよかったなと感じました！ ● 初風さんのステージ担当として、当日お客さんが集まってくれるか不安だったが、たくさんの方が来て下さって嬉しかった。思ったより来場者が多くて驚いた
改善	10	<ul style="list-style-type: none"> ● 全体として想像したよりも来場者が少ないと感じた。大学周辺で看板などを持って学校の場所を案内する係がいてもいいと思った ● キッチンカーで、来て下さった方にもう少ししっかりと列や食べる場所をお伝えする必要があった ● 食べ物を販売しているところをまとめた方が良かった。実際来場したお客さんが、「人気の模擬店○○」の場所が分からず探していた ● 「人気の模擬店○○」は、初日に学生が多く参加することを知らず、情報が伝わっていなかった ● 更衣室や休憩室が高校の方で、大学生の私たちにとっては場所が分からず困った ● 途中から（来場者用）アンケートの記入もやらなくてはならなくなり、とても困った。最初から言って欲しかった ● 当日も学生メンバー以外にスタッフを派遣したり自分がやるからいいと言っていたのに、結局は学生がやって大人たちは見回りに回っていた ● 当日スタッフを最小人数でやろうと言っていたのに、大丈夫だからというので学生でスケジュールを組んだら、結局当日スタッフも予定と違う人数になり大変だった
気づき	8	<ul style="list-style-type: none"> ● 当日は多少のハプニングが起こっても、それをカバーできる余裕が大切だと感じた ● 自分や周りを客観的に見ることができた ● 来場者の要望に100% 応えることはできなかった。少し対応に困ってしまう場面もあり、まだまだ未熟さや自分の力の無さを痛感した

「人気の模擬店○○」の表記は、本研究により一部変更したものである

表5 学生スタッフの感想：Jフェス終了後

カテゴリ	抽出数	【キーワード（抽出数）】主な記述抜粋
経験	10	<p>【達成感・協働など（4）】</p> <ul style="list-style-type: none"> • 多くの人と関わり、自分の積極性や主体性、協調性を培う良い経験 • 大学生生活で1番頑張った。辛い時には仲間が協力してくれる協力性も学んだし、自分たちで作りあげたイベントの達成感も学べた • 一人ひとり考えを持っている中、いかに素晴らしいものを作り上げるか、みんなで話し合いながら考えることが出来た、最高の思い出 <p>【貴重性（4）】</p> <ul style="list-style-type: none"> • 初めて本当の意味で一から関わられた行事 • 大学生活の中での初めての挑戦 • なかなかできない経験 • 今までの学校生活の中で一番楽しくて思い出に残るイベント！ <p>【自信（2）】</p> <ul style="list-style-type: none"> • 自分達で作らした記念イベント • 何をやるかということとは決まっていたが、それをどのようなものにするのかというのは私たちが考えたことであるので、誇りに思う
実践愛	7	<ul style="list-style-type: none"> • 実践女子大学の長い歴史と良さを知ることのできたイベント • 実践をより好きになったイベント • 改めて実践女子大学の魅力について知ることができた • 卒業生や在校生、先生、職員の方などのみんなの実践への愛を知れた • 実践女子学園に誇りを持てる貴重な機会。学歴など関係なく、人として成長できるのが実践女子学園なのだと思え、卒業してからも実践に誇りを持って過ごしたい
場	4	<ul style="list-style-type: none"> • 新たな出会いの場 • みんなで一つのものを作る楽しさと大変さと素晴らしさを学んだ場所 • 様々なことを常に考えながら行動を変化させることの大切さを学んだ場
成長	4	<ul style="list-style-type: none"> • 自分を成長させることができたイベント • 自分の長所も短所も発見させてくれて、活かしたり直したりすることができた
未来	2	<ul style="list-style-type: none"> • これから社会に出て行く上で大きな糧となった • 社会人になる上で必要なことを学べた行事だった

4. おわりに

本研究は、Jフェスプロジェクトの進行中に提案したため調査デザインに限界があった。しかしながら、前述の調査分析結果から、Jフェス活動に参加した学生スタッフには、較著な意識変化が指摘された。自発的にJフェスに参加した学生スタッフは、活動当初からの不安や葛藤を次第に払拭し、試行錯誤を重ねレジリエンスを育み、プロジェクトを遂行し達成感と自己肯定感を高めた。さらにこの意識変化の過程において、プロジェクトチームの集団で個のアイデンティティを模索しつつ、最終的には「実践女子大生としての自分」を認識できたと推知する。この要因には、Jフェス活動がボランティアであったことが寄与していると考えられる。一般的にボランティア活動に参加する意図は、自分が所属する社会において、自分の潜在能力を発揮し、他者との関係で自分の位置を発見することとされている(吉村, 1999)。さすれば、有償のバイトが当然で「自分探し」をしているZ世代の学生スタッフが、あえて無償のボランティアに参加することにより、実践女子大学という社会で、プロジェクトメンバー・卒業生・在校生・来場者の他者との関係性において、「実践女子大生の自分」を発見する契機となったと思われる。

学生スタッフがJフェスの実現に向けて有形無形の支援をし、ボランティアとして重要な役目を果たしたことは、オリンピックのボランティア精神に通ずる。2012年ロンドンオリンピックにおいて、ボランティアは「大会の生命線」「大会の顔」であり、「良い大会をさらに素晴らしい大会に変える」と言われた。陰になり日向になり支援したボランティアたちは‘Games Makers’と呼ばれた(IOC NEWS, 2012)。よって、Jフェスにおいて学生ボランティアスタッフは‘Fest Makers’であったと確信する。



写真2 Jフェス(5月11日)に参加した学生スタッフと教職員メンバー

謝 辞

Jフェス活動にボランティアスタッフとして参加し、本調査にも協力してくれた学生たちに、心から感謝いたします。Jフェス教職員のメンバーのみなさまには、事前研修からフェス終了後のアンケートまでご尽力くださり、誠に有難うございます。お陰様で論文化することができました。

引用文献

- Erikson, E. H. (1982). *The life cycle completed: a review*. New York: Norton.
- Hollingworth, L. S. (1928). *The psychology of the adolescent*. New York: Appleton.
- IBM Corporation. (2017). ジェネレーションZの心をつかむ「IBM Corporation. (2017). Uniquely Generation Z: What brands should know about today's youngest consumers. Route 100 Somers, NY10509」の日本語訳. 検索日2019年8月17日. <https://www.ibm.com/downloads/cas/D7NjG8A6>
- IOC NEWS. (2012). VOLUNTEERS: HELPING TO MAKE THE GAMES HAPPEN. 2012-7-12. 検索日2019年8月17日. <https://www.olympic.org/news/volunteers-helping-to-make-the-games-happen>
- 実践女子大学. (2019). 創立120周年記念イベント「実践女子学園フェスティバル(Jフェス)」を開催します. (5/11・12). 実践女子大学ホームページ. イベント, 2019/04/22(Mon). 検索日2019年8月17日. https://www.jissen.ac.jp/event/year2019/20190422_1.html
- Kohlberg, L. (1981). *The Philosophy of Moral Development: Moral Stages and the Idea of Justice. Essays on Moral Development, Volume 1*. New York: Harper & Row.
- 落合良行. (1991). 心理的離乳に伴う人間不信とその克服. 静岡大学教育学部研究報告・人文社会科学篇 (41), pp. 287-302.
- リアセック. (2018). コンピテンシーテスト Can-Do-Chart. リアセック社より提供. REASAC. (2019). PROG テストについて. 検索日2019年8月17日. <http://www.riasec.co.jp/progtest/test/>
- 吉村恭二. (1999). ボランティアの世界. 東京: 築地書館.
- 全国大学生生活協同組合連合会. (2019). 第54回 学生の消費生活に関する実態調査の概要報告. 検索日2019年8月17日. <https://www.univcoop.or.jp/press/life/report.html>

(こまや まみ/下田歌子記念女性総合研究所 兼務研究員・人間社会学部人間社会学科 教授)

Changes in Student Volunteer Staff Who Participated in the 120th Anniversary Event, J-FEST

KOMAYA Mami

The 120th anniversary event, Jissen Women's Educational Institute Festival (J-fest), was held on May 11 and 12, 2019 at Shibuya Campus, Jissen Women's University. Five projects were set up: outdoor events, indoor events, concerts, corporate sponsorship promotions, and commemorative goods production. A joint team of students and faculty members from a junior and senior high school, university, and junior college was organized, and they worked collectively from the planning of the event to its implementation.

Prior to the J-fest, at the end of the first semester of FY2018, a researcher, who was also a project member, conducted pre-training for 110 applicant university sophomores and junior college freshmen. After the training, 59 students who wished to continue their activities as student volunteer staff became initial members of the J-fest project.

The student staff mostly comprised adolescents in the midst of an identity crisis. Therefore, this study revealed how members of student staff changed their consciousness, i.e., spontaneity, volunteerism, accomplishment, and self-esteem through the J-fest volunteer activities. This study was not proposed in the original J-fest project. However, the researcher offered the project organization research plans from time to time. The pre-questionnaire, a competency test, which forms a part of the PROG test, a program for measuring and nurturing general skills and attitudes required by society, was conducted prior to the start of the J-fest activities in order to test the awareness of the student staff, using a mark sheet distribution and collection method in August, 2018. The questionnaire was completed by 68 members of the student staff. A post-questionnaire was conducted on the website of manaba, the university class support system, from May 18 to June 30, 2019 to understand the consciousness of the 43 final members of the student staff at the J-fest. It assessed their motivation, spontaneity, volunteerism, accomplishment, attention, and thoughts during the process of the J-fest activities. There were 28 respondents. In addition to the questionnaire, reflection sheets were distributed and interviews were conducted to supplement the data. The results of the pre-questionnaire revealed that although practical ability is recognized as a tendency of students who wish to participate in the J-fest, their leadership skills to read the field and move the organization are ambivalent. The results of the post-questionnaire and interviews indicated significant progress from their initial characteristics of anxiety and conflict to their post-activity qualities of ingenuity, improvement, achievement, and self-confidence.

Although the research design was limited by the J-fest organization, the study suggested that the student staff helped realize the J-fest and played an integral role in the event. They became Fest Makers, much like the Game Makers in the 2012 London Olympic Games.